

2025 年 7 月 27 日(日)札幌桑園教会・主日礼拝説教原稿

「失樂園の出来事」(創世記 3 章 1-19 節)

牧師 秋本英彦

今日は午後から 1 泊 2 日で夏期学校が小樽おこばち山荘で行われます。小中学生 20 名が出席しますが、これは幼稚園と共にある教会の特別な恵みです。私が以前いた札幌東部四教会では 2010 年に四つの教会を併せても子どもが集まらず休会となり、隣の札幌北一条教会でも同じ理由で今年の夏期学校は休会と聞いています。今回の夏期学校で子どもたちに創世記 1-3 章における人間の創造と墮落を伝えたいと考えました。人間の始めと罪の起源は今の乱れた時代に対する警告と、そこからの回復の道を示していると感じるからです。今日はご一緒にこの御言葉に学びましょう。

本 論 I. 最初に 1 節から 3 節までをご覧ください。

「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。『園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか』。女は蛇に答えた。『わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないからと神様はおっしゃいました。』」

エデンの園には、人間が生きるため必要なすべての果実がありました。神は「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と 2 章 16-17 節で語っています。神は世界を創造し、動物を創造し、最後に人間を創造し、神に変わって世界を治める自由を与えます。神の戒めは一つだけでした。この善悪の知識の木は「神の主権」とか「神を神と認めること」とも言われます。すべてを支配できる人間も神の主権だけは犯してはならなかったのです。この戒めさえ守れば神の代理者、創造の冠として自由に生き続けることができたのです。

ところがある時、そのエデンに蛇が現れてエバをそそのかします。この蛇は象徴であり、神から離れさせる悪の象徴と言われています。今のようないきどけな姿ではなく、もっと煌びやかな生き物だったとの説もあり、エバと同じ人間のような姿をした絵も残っています。この悪なる蛇が人間に罪を犯させようとしたのです。いつの時代も私たちを誘惑するために忍び寄る蛇のような悪があります。それはテレビやインターネット世界から入ってくる間違った情報、友人や家族からの間違った悪の道への誘いの言葉かもしれません。蛇の姿は普通見えないように、悪の誘惑も目に見えに

くいものです。蛇はエバに「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」と、あたかもエバの味方のように振る舞います。その問いに対してエバは、「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない。触れてもいけない。死んではいけないからだ」と答えたのです。

最初に考えたいことがここにあります。このエバの言葉に人間が罪を犯し始める本質が隠されています。エバは、神の言葉を真剣に受け止めていなかったのです。神は必ず死んでしまうとされたのに、エバは「触れてもいけない」と余計な一言を付け加え、「死んではいけないからだ」と曖昧にしています。神の言葉を薄めたエバは神に対する信頼も薄めています。それは蛇の語りかけによって引き出された心の中にある神への不満でした。もう一つの過ちは蛇と会話をした点にあります。今日の様々な犯罪、例えば不当な訪問販売とか振り込め詐欺も同じです。悪意ある者との会話から、自分でもわからない内に誘惑の穴に引き込まれることがあり得るのです。自分の味方のような存在が、実は神や正義から離れさせるものであることは気づきにくいのです。悪を悪と思わなくなってしまう人間の本质に目を向けましょう。有名なパスカルは「気を紛らわせるものに注意せよ」と語りました。神以外に気を紛らわせるもの、それが罪の誘惑への一歩となりえるのです。今、気を紛らわせるものはテレビやスマホなどの世界に満ち溢れています。インターネットの間違った情報こそが現代の形を変えた蛇、悪魔として動いているのかもしれませんが。神が語られたことや正しい真理よりも、悪意を持って忍び寄る間違った情報が私たちの人間性を奪い、社会を混乱させて罪に陥らせてしまうことに警戒しましょう。何よりも罪の誘惑に引き寄せられる弱さが私たちにはあるのです。

この時まで善悪の知識の木の実は、エバにとって何とも思わない普通の実だったかもしれません。けれども一度、悪に誘惑されてしまった結果、「いかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」と目に映ります。これを「食べるのに良く、目には美しく、賢くなるに好ましい」と訳している聖書もあります。人間の本質的な三大欲「食欲、色欲、名誉欲」と考える学者もいます。あるいは、この木の実に引き寄せられる人間の心は、自分中心的にすべてのものを欲しがる無制限の所有欲とも言われています。その所有欲は神をも自分の下に置きたいという暴力的なものなのです。その心の欲望が蛇の誘惑によってエバの心の中に燃え上がり止めることができない状態に陥らせたのです。

本 論Ⅱ． 続いて4節から13節までをご覧ください。(聖書箇所割愛)

このとき、蛇は女に対して「あなたは死ぬことはありません」と語ります。蛇の言葉に神が語ったことに対する反発と傲慢を見ることが出来ます。悪なる存在は神に敵対する強い意志を持っています。神を認めようとしない悪は正しい者を墮落させようとします。神と神の言葉に対する挑戦的誘惑的な言葉です。キリスト者であるなら、「いつも礼拝を第一にして何になるのですか。それをしないと天国に行けないなどと神は本当に言われたのですか」という悪の声が聞こえてくることはないでしょうか。あるいは「主の教会というけれども、そんなに熱心になる必要があるのですか。頑張っただけの恵みが神からあなたに返ってきたことがありますか。逆に辛いことばかりがあなたの回りに起こっているのではないですか」。そんな私たちの心に語りかけてくる悪の声もあると思います。エバはその誘惑に負けてしまいました。エバは善悪の知識の実を口にし、さらに夫アダムにも食べさせます。罪は罪を、悪は悪を、戦争は戦争を生み出して広がる性質を示しています。しかし聖書はエバ個人の罪を問題にしません。ここは人間の本質の物語でアダムも同じです。そしてアダムの子孫である私たち一人一人も同じです。つまり女であるエバ、男であるアダムを越えて、私たち一人一人が神の約束を軽く受け止め、悪の誘惑に惑わされて、善悪の知識の実を取りうる過ちを持つ者です。人間誰しもが神の命令に違反した存在であることを教えているのがこの箇所の子題です。

その結果、罪を犯したアダムとエバは神の前に立てなくなります。そのため神の前から姿を隠します。やがて神が現われてアダムとエバを探し、善悪の知識の実を食べしまった二人を問い正します。アダムはエバがそそのかしたと言い、エバは蛇が誘惑したと弁解します。ここに罪の責任転嫁を見ることが出来ます。罪とは自分の過ちを認めず、言い訳をして責任転嫁させようとする性質がありますが、そのことが最もよく現れている箇所です。人間の罪の本質、それは「神への不信、神の言葉を曲解して反発する、罪を犯した時の責任転換、自己正当化」等によく表されています。

本 論Ⅲ. 最後に 14 節以降をご覧ください。(聖書箇所割愛)

神の像に作られた人間は、本来は神と共に生きることのできる存在でした。しかし人が罪を犯した結果、神の像は失われてしまいました。その結果、土から創られた人間は土に還る、すなわち死ぬという刑罰を受けることになったのです。アダムは汗を流して働きの苦しみを味わいながら死んでゆくようになります。エバは男に支配され、子孫を残す務めを得るので

すが、産みの苦しみという苦難を伴い、やはり死んでゆく存在になります。それだけでなく、これ以後人間は自己中心という罪の道を進みます。時間がないので触れませんが、最初に生まれた兄カインが弟アベルを殺すことや以後の歴史にそれが現われています。さらに神が創造した自然も利益のために破壊することも躊躇しませんでした。国益のためならば他国を侵略することも平気で行い罪なき人々を殺害します。それは人間の自己中心という罪の結果でもあるのです。世界中の異常気象、この国の様々な混乱、家族ですら平和を失った世界に陥った最大の理由は、人間が神に背いた罪の結果だというのが創世記の一貫した主張なのです。

けれども 15 節をご覧ください。ここに救いがあります。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、私は敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く(15 節)」 この箇所は古くから原福音(げんふくいん)と呼ばれています。ここで蛇の子孫は悪魔を象徴しています。女の子孫は人類を指すのですが、ここでは神の子イエスに焦点をあてています。主イエスは第二のアダムとも呼ばれます。**「彼(キリスト)はお前(悪魔)の頭を砕き、お前(悪魔)は彼(キリスト)のかかとを砕く」**とは、その戦いの様子です。蛇なる悪魔は死という武器をもって人間たちに噛みつきました。人間はすべて死の毒に勝てない存在となりました。けれども女の子孫、主イエスは死にませんでした。悪魔は十字架で主イエスを殺します。しかしかかとを噛んだ蛇を逆に踏みつけて殺すように、キリストは復活によって悪魔の武器である死を滅ぼしたのです。復活によって死を完全に無力なものにしたと預言的に解釈したのです。また神はアダムとエバを追放する際、「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた」(21 節)とも記されていますが、この皮は動物の犠牲を暗示させていて小羊であったこと、また着るとは身代わりを意味しているとも言われます。今日では様々な義論がありますが、多くの教会教父も宗教改革者もこれを支持しています。

罪と死の世界から救われる道が今も用意されています。それがキリストの十字架と復活による命の道です。悪の誘惑を断ち切るのは神の言葉への徹底的な服従とキリストへの信仰のみです。教会こそ現代の回復されるエデンの園と言えるかもしれません。たとえ罪を犯したとしても赦される道、勝利の道があります。それを指し示しているのが十字架です。すべての人々が神の元に立ち返ることが出来るように祈りを合わせましょう。